

氏 名 (本籍)	きむ すー きょん 金 秀 敬 (韓 国)
学 位 の 種 類	博 士 (感性科学)
学 位 記 番 号	博 甲 第 6181 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審 査 研 究 科	人間総合科学研究科
学 位 論 文 題 目	<b>Preference Mechanism in Product Evaluation using Automotive Image by an Approach of Kansei Information</b> (車のイメージを用いた製品評価における、感性情報研究方法による嗜好メカニズムの研究)
主 査	筑波大学准教授 博士 (工学) 花 里 俊 廣
副 査	筑波大学准教授 博士 (デザイン学) 五十嵐 浩 也
副 査	筑波大学講師 博士 (医学) 首 藤 文 洋
副 査	千葉工業大学教授 博士 (デザイン学) 佐 藤 弘 喜

## 論 文 の 内 容 の 要 旨

### (目的)

工業製品は消費者あるいは使用者がその製品の品質を「欲しい」と評価することによって所有のための意志決定がなされる。消費者が「欲しい」と評価するために必要な刺激として、商品の外観が果たす役割は大きい。本論文では、消費者がその商品を気に入るための要件として、商品画像に対する「好み (preference) の構造」について検討し、「好み」の構造が意志決定に関与すると想定される評価に与える影響について解釈を試みたものである。

### (対象と方法)

代表的かつ誰でもが評価しうる工業製品として車を題材として設定した。調査分析方法は 1) 調査対象としたイメージに対する直観的好み評価の段階、2) その好みを基準に、異なった評価を受けたイメージの要素を組み合わせる再構成したイメージを評価する段階に分け、それぞれの間に 1 週間の間隔をあけて「被験者が直観的に行う評価とそこに含まれていたイメージの要素が全体評価に及ぼす影響」を測ろうとしている。

1) の段階において、100 枚以上の車の写真を提示し、被験者に「好み」を答えさせることで「特定の被験者の好み」を捉え、その結果を好きな (嫌いな) 全体形状、好きな (嫌いな) 部分形状、好きな (嫌いな) 前面、好きな (嫌いな) 側面に分解している。その後この評価を用いて好き / 嫌いを組み合わせたサンプルを用いて評価することから、必然的に 2) 段階における実験刺激は被験者毎に異なったものとなる。すなわち、第 2 段階におけるイメージ評価実験においては、被験者毎に刺激画像を作らなくてはならないということになっており、手続きとしても刺激作成の作業としても非常に複雑になっている。それぞれ初期段階で用いたイメージは 100 種類以上であり、被験者は各実験で 20 名程度であった。

### (結果)

車の前面、側面、スリークォータービュー、正面 + 側面による図面的表示の刺激バリエーションを用い、最終的には、これらのパターンにおいて以下の傾向を確認することに成功している。

- 1) 正面、側面、スリークォータービューはいずれも刺激画像が1枚にまとめられているが、このケースにおいては、再構成された刺激において、好きと評価されたイメージの全体形状とヘッドライトの組合せが最も「好き」「快い」「バランスが良い」と評価され、ヘッドライトのみ嫌いなモノと再構築したケース、全体形状のみ嫌いなものを組み合わせたケース、嫌いな全体と嫌いなヘッドライトの組合せ、の順に「好み」などの評価が下がることを確認した。他方で、正面＋側面として表示した場合には、正面または側面のどちらか一方が「嫌い」であった場合には全体が「嫌い」「不快」「バランスが悪い」となる結果が得られた。すなわち、一体化した場合は「部分の好み」の全体の評価に対する影響は線形的に予測できるのに対して、独立したイメージを意識的に合成させた場合にはその影響が線形的に合成できないという解釈が可能であるとしている。
- 2) 第1) 段階において、刺激画像を一枚ずつ直観的に評価した場合に比べて、刺激画像を全て比較しつつ好みを決定する場合では再構築されたイメージの評価がはっきりと確認できることを確認している。すなわち、好みの評価は直観的なものだと考えられるが、それでも与えられた条件の中で相対的に評価することにより、その主観評価の位置づけがより明確になるのではないかと考える可能性を見出している。

#### (考察)

結果として、製品評価において、部分と全体が合成された画像を用いる場合には部分の好みの影響は小さく、前面と側面のように分割して見せる場合には部分が全体の評価に取り変わってしまう危険性があることが明確にされた。これは言わばデザイナーが創造活動を行う際に典型的に用いるパースペクティブビューと図面の違いであり、表示の方法によって部分の好みの影響が異なることをデザイナーが意識するための一つの基準を示したものと言えよう。

#### (批評)

第一段階における全体の評価を部分の評価に当て嵌めた点や、イメージ合成による全体評価への影響を想定した点など、仮定に基づく研究設定に問題はあるが、好みの評価を客観的に行うことは極めて難しく、意欲的な研究であり、何よりも現実のデザインの評価に一定の知見を加える感性科学的研究として評価することができる点に価値があると考えられる。

### 審 査 の 結 果 の 要 旨

平成24年2月6日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（感性科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。